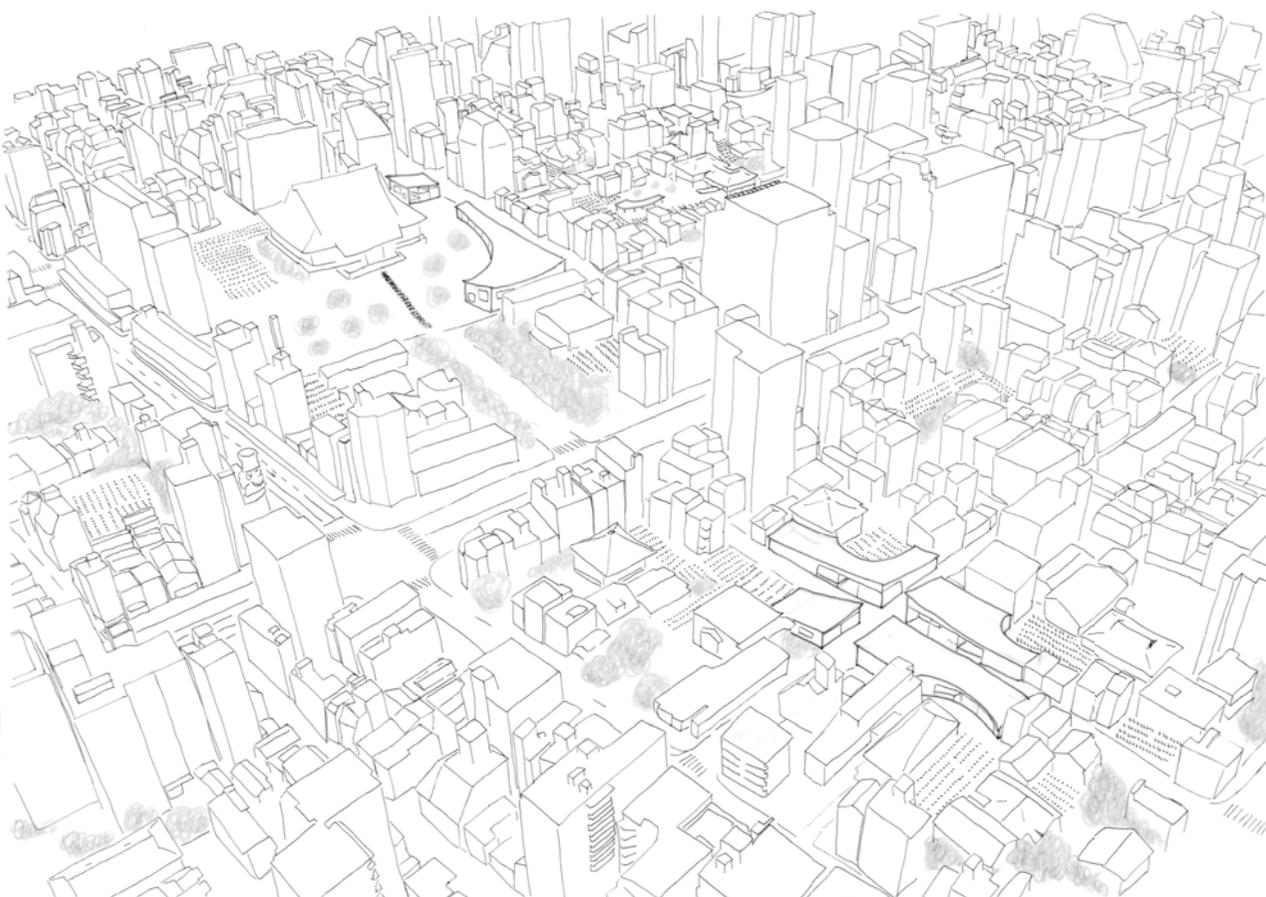


寺は何のための建築で何のために存在しているのだろうか。寺社が江戸時代までもっていた教育、福祉、文化芸術、冠婚葬祭など地域拠点として持っていた多くの機能は消え、寺は時々の人々のお祈りの空間（法要）と葬式のための存在でしかなくなっている。特に都心部では人が定住せず入れ替わりが激しくなる中で、檀家は減少し寺の存続も危ぶまれている。

このような環境でバラバラに散らばった寺の、もとあった機能を再編集し都市の中で寺を中心とした地域拠点を作ることができないかと考えた。



寺の歴史

寺の変遷



江戸時代
江戸時代の寺が地域の中で果たした公益として主に教育、福祉、芸術文化があった。教育は寺子屋事業、福祉は寺敷地内に病院、薬局、社会福祉施設や旅をしながら慈悲行に努める僧がいた。芸術文化はもとと奉納豆や勧進興行などの芸能が日本の演劇のルーツになっているとされる。一方葬式は自宅で行う自宅葬が主流で、寺との結びつきもそこまで強くなかった。



明治以降
明治近代の民法による「家制度」を契機に葬式と寺の結びつきが強くなり、葬式仏教が生まれた。葬式は自宅葬。



高度成長期
社会儀礼の大型化により自宅葬から寺葬に転じた。



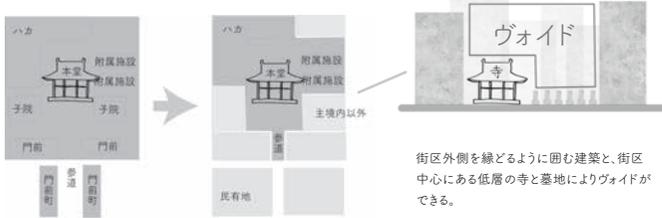
現在
地域のコミュニティが薄れ近所の人が葬儀に参加しなくなったため、檀家寺で葬儀をする意味がなくなり、アクセスと利便性を重視した葬儀場で葬式が行われる。結果檀家寺は都市の中で浮いた空間になる。



これから
かつてあった寺の公益を現代に合わせた形で再編集して寺に集める。これにより江戸時代以前に寺に根付いていたコミュニティを更新する。

都市の中での檀家寺の現状

住居一体の寺



街区外側を緑のように囲む建築と、街区中心にある低層の寺と墓地によりヴォイドができる。



寺が持っていた敷地が廃仏毀釈の影響による寺領の切り売りで縮小した。街区の周囲から売られたため、街区内部に押し込まれるように寺がある。

3階	住居
2階	本堂
1階	受付・待合室

寺領が減少し小さい敷地を有効的に使うため住居と一体となった寺がある。
1階は受付兼待合室
2階に本堂
3階以上が住居の場合が多い。

境界性



寺と墓地を囲む背の高い塀が強い境界性をつくり出している。この塀により境内と道が断絶され人の往来が限定される。



寺を囲む建築が寺と参道ぎりぎりまで迫ってきているため外部からは程よい目隠しになり、寺の奥性をつくりだしている。檀家さんの法要やお葬式の際の緊張感をつくりだし参道外部からの視線を遠くともにも周辺建物からの視線はもろに受ける。

都市の中で閉じた寺を考える

敷地 一西浅草・寿地域一

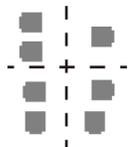


敷地は上野駅と浅草寺の中間に位置する西浅草・寿地域。この地域は江戸時代から東本願寺を中心に周辺に小寺院が多く建ち寺町を形成していた。明暦の大火、関東大震災、太平洋戦争など数々の災害で何度も寺院が再建され、防火地域にも指定されていることから、当該地に建つほぼ全ての寺院がRC造で独特な形態を有している。

1/2500 敷地	寺院	住職住居
	公共施設	学校
	仏具店	

寺の表と裏の空間

寿



4つの街区に散らばっている寺は中心の道に背をむけている。この道は車通りが少なく、地域の人の歩道になっている。

寺の裏が道の結節点にぶつかる

西浅草



寺が向き合う表の道は檀家さんが法要のために通る葬いのための道。

寺が向き合う表の道と街区に囲まれた裏がある



寺が街区内部に背を向ける裏の場所。墓地にも囲まれ忘れられた空間になっている。

街の風景

境内



お寺の表部分に多く有する、せつかつの広い境内でも全く人の出入りがない。

祭りのとき



お祭りのときには車庫や建物1階のくりぬかれたような部分で多くの人が宴會を開く。

路地



建物と建物の間にできている路地は多くが裏のお墓にたどり着く、朝と夜で閉じられていてかなり固まっている。私たちの生活とは断絶している。

墓地



街区の外まった場所で作っている。まちの人は全く入らない静かな場所。

お寺の基壇

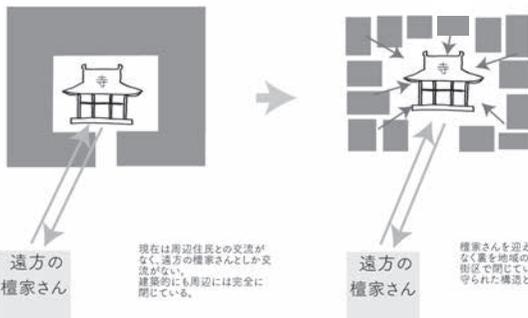


お寺は現世との境界のため基壇があり、必ず本堂まで階段を上る。ここで緊張感を高めている。

これらのまちの要素を建築におこむ

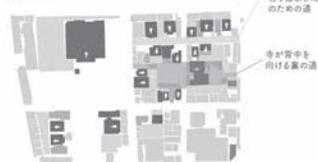
ダイアグラム

全体の考え方



西浅草

裏の道



寿



建築内部

スラブの積層

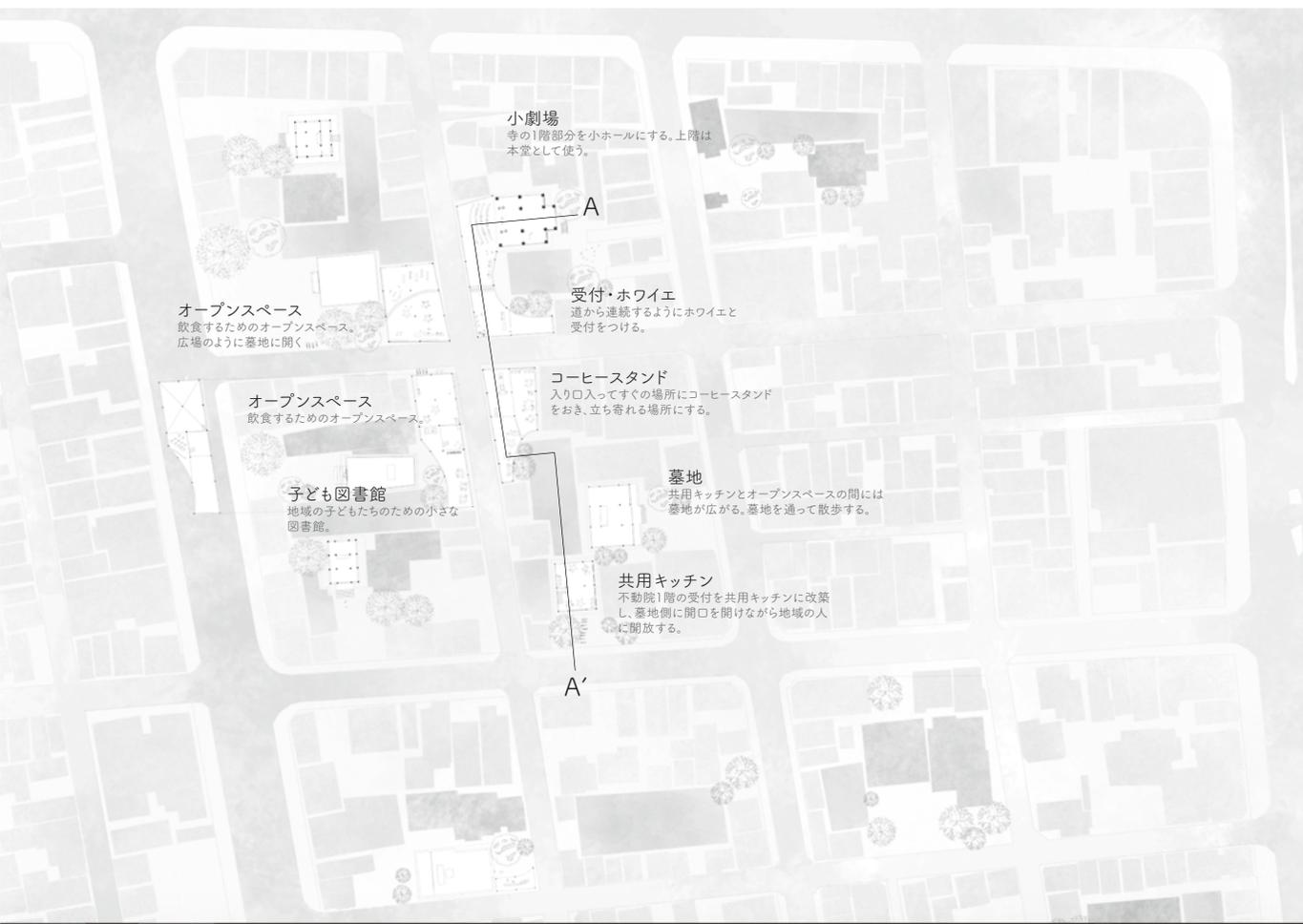


寺の基壇に対してスラブをなだらかに連続させることで境内のレベルを緩やかにつなげる。

高層化した寺



高層化した寺の1階部分をスロープをいれたらオープンスペースとして使う。



オープンスペース
飲食するためのオープンスペース。広場のように墓地に開く。

オープンスペース
飲食するためのオープンスペース。

子ども図書館
地域の子どもたちのための小さな図書館。

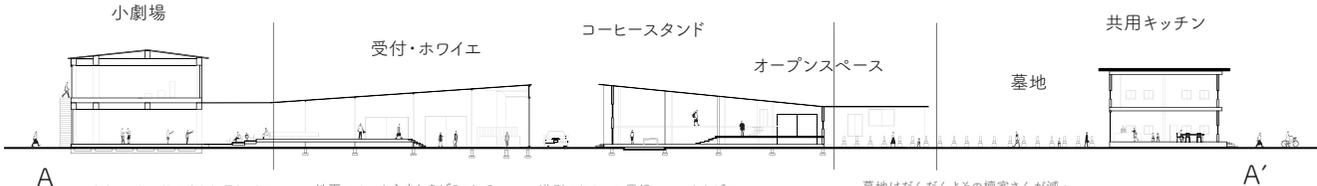
小劇場
寺の1階部分を小ホールにする。上階は本堂として使う。

受付・ホワイエ
道から連続するようにホワイエと受付をつける。

コーヒースタンド
入り口入ってすぐの場所にコーヒースタンドをおき、立ち寄れる場所にする。

墓地
共用キッチンとオープンスペースの間には墓地が広がる。墓地を過って散歩する。

共用キッチン
不動産1階の受付を共用キッチンに改築し、墓地側に開口を開けながら地域の人に開放する。



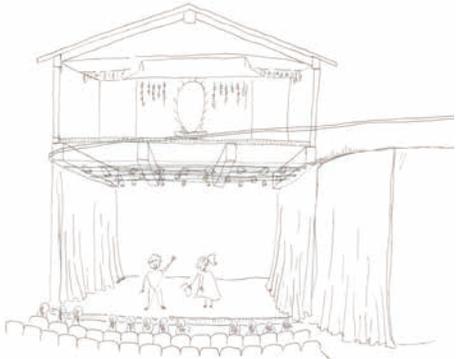
小劇場
法事するとき以外の空き部屋解消のために1階部分を改築して小さな劇場をつくる。権家さんのためだけだった寺が地域のものになる。

地面レベルから少しあげることによって劇という非日常のできごとにあう緊張感をつくる。

道側にむかって屋根レベルをあげて、街区内部への連続性と視覚的な境界をつくっている。

墓地はだんだんよその権家さんが減って広場化したり、この地域の人々と交流をもつことで地域の人が権家になる。知り合いのお墓があればもうよその土地ではなくなる。

A-A' SECTION



小劇場
1階部分は小劇場、2階部分はお寺として使われる。1階部分が地域に広く開くことでお寺全体が地域に根づく。



コーヒースタンド
道から連続するようにスラブが重なり、大きな開口から周囲の建物と街区内側の墓地を緩やかに連続させる。

デイサービスセンター

道側には視覚的に垣根となるように高く構え、境内内側に向かってなだらかに傾斜し、境内という広場親和する。スラブをだんだんに積層させ、境内内側からなだらかに建物内部にも広場が連続する。

B

C'

C

幼稚園

道側には視覚的に垣根となるように高く構え、境内内側に向かってなだらかに傾斜し、境内という広場に連続する。

参道

参道の脇に立ち並んでいた倉庫をなくし、緑に囲まれた参道に整備する。

葬いの道(表の道)

寺が道側を向く表の道は葬いの場として遠くに住む檀家さんための道になる。同時に1階部分がピロティになっているため、檀家さんが休む場にもなり、奥に広がる墓地も眺める。

A

墓地の広場(裏の道)

寺を中心として墓地に囲まれた、地域の人だけの広場、秘密の場所になる。ピロティから表の道の様子もかがえる。



参道から東本願寺を眺める



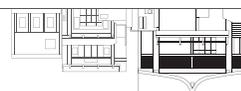
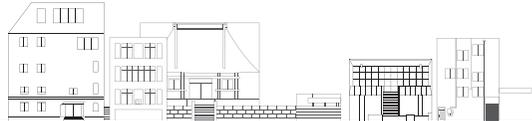
墓地の広場(裏の道)
軽い屋根をかけて近所の人が集まれる場所にする。



墓地の広場(裏の道)
お寺の側から広場、東本願寺を望む。



お墓参りに訪れた檀家さんのために、受付・住居になっていた1階部分をピロティにして、休憩場所や水飲み場として利用できるようにする。



1階をピロティにすることで裏の道の広場の様子も垣間見える。檀家寺が檀家さんのためだけのものでもなくなる。

A ELEVATION

東本願寺

西浅草・寿地域いちばんの規模の寺。
建物に改装は施さず、境内に木を生やし、周囲
の建物を境内内側に緩やかに連続させる。

東本願寺境内

この地域で最も大きい空地。街区外には一定の
距離感を置きながら内部の境内には開く。

B

B'

B-B' SECTION

幼稚園内から境内を望む

東本願寺と幼稚園が向き合い、幼稚園とデ
イサービスセンターで境内を縁どるように
囲むことで街区外側との境界性をつくりだ
し、地域の人々や子どもたちが過ごす広場
になる。

俗世と切り離す意味で東本願寺にある基
壇に対比して、幼稚園には大きな段差を作
らず、スラブが段階的に少しずつ積層する
ことで地面レベルとの緩やかな連続を意
識する。幼稚園が境内の一部になる。



C

C'

C-C' SECTION

デイサービスセンター

積み重ねたスラブが境内から見えるよ
うに、境内側はガラス張りにする。
また葬いの道(表の道)からきた人々を
幼稚園と迎い入れるように建物を切り
離している。

